

2020年7月NHK四国地方放送番組審議会

7月のNHK四国地方放送番組審議会は、20日(月)、東京第一ホテル松山において、9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、事前に視聴してもらった四国らしんばん「もう一度 前を向いて ～高校最後の夏にできること～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、8・9月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	半井 真司	(四国旅客鉄道 代表取締役会長)
副委員長	柴田 智恵	(有限会社大豊陸送 代表取締役社長)
委員	神田 優	(NPO法人黒潮実感センター センター長)
	黒笹 慈幾	(南国生活技術研究所 代表)
	田井 ノエル	(小説家)
	床桜 英二	(徳島文理大学 総合政策学部 教授)
	土佐 礼子	(三井住友海上火災保険 陸上競技部 プレーイングアドバイザー)
	中矢 憲吉	(愛媛新聞社 編集局次長)
	滑川 里香	(一般社団法人マチのコトバ徳島 代表理事)

(主な発言)

<四国らしんばん「もう一度 前を向いて ～高校最後の夏にできること～」
(総合 7月10日(金)放送) について>

○ 野球だけではなく、複数のスポーツに焦点を当てていた点がよかった。梶原高校野球部の取材では、部員の本音や素の表情をよく切り取っていた。部員が6人しかいない阿波西高校の取り組みには心打たれた。池田高校から阿波西高校に派遣された選手はどのような基準で選ばれたのかが気になった。今治東中等教育学校のなぎなた部の映像は美しく、部員や監督の直筆の文字を映像に重ねる演出は、気持ちが伝わってきてよかった。高知東高校のレスリング部部長の「もう逃げたくない」ということばも心に響いた。前向きな高校生や顧問の先生らの一連の話は非常によかった一方、部活

動の大会がなくなった部員たちの悔しい気持ちがあまり取り上げられていないように感じた。スタジオゲストの秋元才加さんの受け答えは、終始しっかりしていて番組を引き締めていたと思う。全体の構成や映像、ナレーションなど、総じて質の高い番組になっていた。

- 登場する高校生や指導者のことばはどれもすばらしく、心に響くもので、十分に取材が行われていると感じた。パートごとの項目タイトルは、「たとえ夢が失われても地域とともに挑む夏」「部員不足を乗り越えて最後の夏の舞台へ」など、端的ながら視聴者の印象に残るものになっていて、ことば選びにセンスが感じられた。番組の最後で、新型コロナウイルス感染拡大の影響によって目標としていた部活動の大会が中止となったことで喪失感を覚えつつも、将来のために自分と向き合う時間として前を向く高校生たちを紹介していた。高校生だけではなくすべての人たちにも伝わるメッセージとなっており、番組のまとめにふさわしいものだと感じた。学生時代にバスケットボールに取り組んでいたという秋山さんと、元プロテニスプレーヤーの杉山愛さんという2人のゲストのコメントは、それぞれ経験者ならではの説得力があってよかったと思う。冒頭で明德義塾高校野球部がミーティングをしている様子が映し出されていたが、その後の登場がなかったのが気になった。
- 大変な状況の中でもしっかりと現実を受け止め、気持ちを切り替えて前を向く高校生たちの姿に驚いた。「地域の人のために」と奮闘する梶原高校野球部の主将や、目標を切り替えて精神的に成長した今治東中等教育学校や高知東高校の部員たちの様子にはとても感激した。部員が6人しかいない阿波西高校野球部が大会に出場できるように部員4人を派遣した池田高校の監督の語った「答えが10年後、20年後に分かれれば、そのときがコロナに勝ったとき」ということばは、とても印象的で勇気づけられるものだった。映像中にゲストをワイプで見せる演出を多用していたが、映像が見えづらくなっていることがあり気になった。学生時代に部活動に取り組んでいた秋元さんをゲストに起用していたが、部活動に取り組む子どもの親や部活動の指導者など当事者のほうが、より視聴者に共感を持ってもらえたのではないかと感じた。新型コロナウイルスの感染拡大が及ぼすさまざまな影響が子どもたちの成長にどうつながったのかなど、引き続き発信に取り組んでほしい。
- 高校の運動部に焦点を当てた番組は少なく、新鮮に感じた。3年生にとっては集大成となる大会が中止になっており、高校生たちの喪失感ややるせなさなど、心の葛藤がとてもよく表れていて、しっかりと取材されたよい番組だった。過疎化が進む町の希望を託された梶原高校野球部や他校から生徒の派遣を受けて大会出場を果たした阿波西高校の例は、大人がどのように高校生を支えられるかを示していてよかった。今

治東中等教育学校のなぎなた部の紹介では、生徒が思いのたけをつづったノートも使って心境の変化を伝えており、とても丁寧に取材していると感じた。高校生たちが困難に直面しながら、一歩ずつ成長している姿がよく伝わってきた。元サッカー日本代表の前園真聖さんが四国各地の部活動を訪ねてエールを送る企画を放送するという予告があったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で取材が困難になるのではないかと気になった。高校生だけではなく小・中学生も修学旅行や運動会が中止になるなどの影響を受けているので、そういった点も取り上げてほしい。

- 困難を乗り越えて前を向こうという気持ちになれる番組だった。指導者などの周囲の大人の支えが大切だということも改めて感じた。バドミントン日本代表の桃田賢斗選手が高校生に経験を伝えることには説得力があったが、高校生たちがどう感じたのかが聞きたかった。梶原高校野球部では、部員たちが地域の支えになっていることが伝わってきた。阿波西高校野球部は、指導者のほうが部員たちから力をもらっているように感じ、心が温まった。他校から部員の派遣を受けて大会に出場できる高校野球の特別ルールについて、詳細な説明がほしかった。今治東中等教育学校のなぎなた部員が、大会中止を受けて思いのたけをつづったノートにあったことばは印象的で、心に残るものがあった。ゲストの秋元さんや杉山さんのコメントは安定感があり、高校生にも伝わる印象的なものになっていた。谷地健吾アナウンサーの表情や服装が明るい雰囲気でもよかった。

(NHK側)

新型コロナウイルスの感染拡大が進む中で、さまざまな苦難を強いられている高校生に向けて、その経験は必ず今後の糧となる、周囲もそのための支えは惜しまないという前向きなメッセージを伝えることが、番組の一つの主題だった。新型コロナウイルス感染拡大の影響により、目標としていた大会が中止となる中で、高校生がどのような思いや苦悩を抱えているのか、その本音を伝えたいと思って取材を始めたが、高校生たちが想像以上に前向きだったことは取材者として驚いた。た。そのことがとても印象的だったので、今回の番組は「もう一度前を向く姿」というタイトルの通り、前向きなメッセージを伝えることに主眼を置いた。冒頭の明德義塾高校野球部の映像は、全国高校野球選手権大会の中止が決まった日の野球部の様子を紹介したいと思い、高知局が取材したニュースの映像を用いて伝えた。ワイプについては映像の大切な部分と重ならないように位置やタイミングを考え、なるべく控えめに使用したつもりではあったが、指摘を参考に、引き続き適切な使用方法を検討したい。

(NHK側)

前園さんが四国各地の学校の部活動を訪ねる番組については今後取材を予定しているが、新型コロナウイルスの感染の拡大状況を考慮した上で、対策を十分に行い慎重に対応するつもりだ。目標としていた大会がなくなり、残念な思いをしている子どもたちをどのように支えていくかについては、子どもたちの声を集めて、子どもたちに寄り添った番組の制作に、四国だけではなく、NHK全体で取り組んでいきたい。

- 部活動の大会の中止によって大きな目標を失った高校生たちの状況や、競技との向き合い方がよく取材されていた。また地域の人や監督など、周囲の大人がどのように関わっているのかという視点も描かれていてよかった。番組冒頭で、甲子園球場と明德義塾高校が映し出され、全国高校野球選手権大会について取り上げるのかと感じた直後に、「高校総体が中止に」というナレーションが入る構成は、見ていて違和感を覚えた。阿波西高校と池田高校の合同チームについての説明が少なく、分かりにくく感じた。「この経験を糧に頑張りましょう」という最後のコメントは、明るくまとめすぎているような印象で、番組をきれいに終わらせるという構成上の都合のように感じられて気になった。ゲストの秋元さんと杉山さんのコメントの分量や画面に映る時間に差があったことも気になった。新型コロナウイルスの感染拡大によってあらゆる分野に影響が出ている中で難しいテーマだったと思うが、全体としては興味深い内容で前向きに視聴できた。
- 今の時流に合ったとてもよい番組だと感じた。高校生が苦悩しながらも自分なりに克服し、前向きな気持ちで再スタートを切ることの難しさと大切さを分かりやすく伝えていた。一方で、短い放送時間の中で複数の話題を取り上げていたが、まとまりがなく、番組の主題が伝わりにくくなっているように感じた。シリーズで放送するなどして、もっと一つ一つ的话题をしっかりと掘り下げてほしかった。桃田選手と香川県の高校生のオンライン対話のパートがとても短く、拍子抜けだった。スタジオの秋元さんとリモート出演の杉山さんの2人のゲストは、役割がいまひとつはっきりしていないように感じて気になった。もっと子どもたちと監督、地域の人たちのすばらしいことばを紹介し、それを中心に据えた構成でもよかったのではないかと感じた。多くの高校に野球部がある中で、なぜこれらの高校を取り上げたのか、説明があったほうがよいと感じた。
- 高校3年間の集大成として、全国高校野球の地方大会に代わる県独自の大会に思い

をかける野球部の部員や、現実を受け止めながら今できることに一生懸命取り組もうとしているなぎなた部の部員、自分に打ち勝とうと奮闘するレスリング部の生徒の様子が丁寧に描かれていた。今治東中等教育学校なぎなた部の監督の語ることは、突然の大会中止にやりきれない思いを抱える3年生の部員たちの気持ちをととてもよくくみ取っていて、その一つ一つに共感した。ほかの指導者のことばも含めて、多くの視聴者に伝わるものがあったと思う。後輩の指導をする生徒たちの姿もりりしく、すがすがしくてよかった。スタジオゲストは好印象だったものの、起用した意図が伝わりにくいように感じた。リモート出演のゲストもいたため、それぞれ1人あたりが話す時間が短くなり、もったいないと感じた。そもそも、学校の取材部分の内容がととてもすばらしかったので、ゲストは不在でも問題なかったのではないかと感じた。

- 高校生活の集大成となるはずの全国高校総体や全国高校野球選手権大会が中止となり、苦悩する3年生と彼らを支える周囲の大人たちの姿がよく描かれており、番組の主題がしっかりと伝わってきた。梶原高校野球部が地域住民の支えで成り立っているという話題や、池田高校の協力で大会に出場できた阿波西高校の生徒たちの明るい笑顔など、印象に残る場面が多々あった。また大会がなくなった今治東中等教育学校なぎなた部と、指導者の助言を受けながら最後の夏の練習に打ち込む高知東高校レスリング部の3年生の姿に心打たれた。大人の支えによって子どもが前を向いていることが分かり、大人の役割の大切さが理解できた一方で、大人の目線でまとめているようにも感じた。番組で紹介したような前向きな学生は一部で、大多数は進学や就職など進路に苦悩しているのではないかと思う。もっと高校生の本音に踏み込んだ内容が見たいと感じたとともに、子どもたちが将来に不安なく学業や部活動に取り組める社会を、大人が努力して取り戻さなければならないと考えさせられる内容だった。

- 梶原高校野球部と地元の方々との交流の様子からは、生徒たちが地元で溶け込んでいることが分かり、地域にとってなくてはならない存在であることが伝わってきた。阿波西高校野球部の部員たちが、人数が少ないながらも決して諦めず黙々と練習に取り組む姿はすばらしかった。池田高校から選手の派遣を受け、練習試合で勝利した場面の生徒たちの表情は印象的だった。今治東中等教育学校なぎなた部の部員が思いのたけをつづったノートと監督のやり取りについて、もっと掘り下げてほしかったと感じた。高知東高校レスリング部の部員が、自分の弱さを克服したいという強い気持ちで練習に取り組んでいる様子も心打たれるものがあった。番組で取り上げた高校生たちはみなとても立派だったが、より多くの高校生の本音や苦悩をもっと拾い上げて掘り下げてほしいとも感じた。ゲストの秋元さんは好印象で適任だと感じたが、四国出身のゲストの起用がなかったのが気になった。

- 全国高校総体や全国高校野球選手権大会の中止が決まり、高校スポーツの状況が刻一刻と変化する中で、短期間で取材・編集を行って番組として発信したことを評価したい。それぞれの話題は断片的に感じる面もあったが、“異例の夏”に向き合う高校生や指導者の思いがよく伝わってきた。一方で、全国大会の結果が進路に直結するような大学への進学や実業団への就職を希望している生徒についても取り上げたほうがよかったのではないかと感じた。大会の中止が生徒の一生を左右するという切実さを伝える必要があったと思う。大会の結果に左右されるような既存の選抜システムについて、その問題や対策について検討する必要性があるのではないかなど、建設的な提案がほしいと感じた。2人のゲストは、華があってとても豪華に感じ、コメントも非常に的確で適任だったと思う。

(NHK側)

池田高校が阿波西高校に選手を派遣するにあたっては、部員不足を補うために他の学校から応援を派遣することができる「単独廃校ルール」というものがあり、そのルールを用いて阿波西高校は大会に出場することができた。その説明が不十分だったという指摘については、限られた時間の中でもより分かりやすく伝えるよう、今後はより工夫したい。ゲストは、若い世代の気持ちに寄り添うことができる秋元さんと、プロのアスリートだった経験から苦しい状況を乗り越えるヒントを話すことができる杉山さんを起用した。ゲストのコメントによって番組の雰囲気も変化し、視聴者に与える印象も変わってくるため、今後も引き続き適切に番組の主題を伝えることのできるゲストを選出したい。桃田選手は四国出身の現役のアスリートであり、さまざまな困難を乗り越えた方だからこそ若い世代に伝わるものがあると思ひ、短い時間ではあったがオンラインイベントの映像を引用するかたちで取り上げることにした。

<放送番組一般について>

- 6月14日(日)のBS1スペシャル「ジャパニ～ネパール出稼ぎ村の子どもたち～」を見た。働き手の多くが日本に出稼ぎに出るといふネパールにある村の過酷な現実を、日本在住のネパール人映像作家ディペシュ・カレルさんが母国と日本で記録したドキュメンタリーで、2時間近い放送時間だったがとても見応えがあった。ヒマラヤ山脈を望む小さな村の景色はとても美しく、村に暮らす9歳の少女ビピシャの語ることばからは、日本で出稼ぎをする両親や日本という国への思いがしっかりと表現さ

れていて、子どもながら本質を突いてとても印象に残った。ネパールと日本を何度も行き来しながら、村やビピシャの過酷な現実をしっかりと映像でとらえていて、通訳を介してではできないような非常にしっかりとした取材がされていると感じ、好感を持った。本当の幸せとは何かを考えさせられる、とてもすばらしい内容だった。新型コロナウイルス感染拡大の影響によって、ビピシャの家族の生活の見通しが立っていないことが、最後にテロップで簡単に紹介されていて気になった。続編に期待したい。

- 7月1日(水)のはりきり体育ノ介「はりきり水泳ノ介～クロールに挑戦だ！」を見た。サイボーグのキャラクターを使ったアニメーションの導入部分はおもしろく、オリンピックにも出場した元競泳選手の宮下純一さんによる水泳映像を用いた実技指導もあり、10分という短い放送時間ながらクロールのコツがしっかりと押さえられていた。体育教師や専門家が実技を指導するのではなく、クロールのポイントをサイボーグに“インストール”するといった子どもが楽しんで見てもらえる工夫があり、子どもの理解が深まる内容になっていてよい番組だと感じた。そのほかの体育実技についても、小学校の学期ごとに分けてトップアスリートの実技を見せて紹介していることに興味を持った。今後も継続視聴したいと思える内容だった。
- 7月3日(金)のひめDON！ 出張ひめDON！「豪雨から2年 復興応援スペシャル in 乙亥会館」を見た。被災地に笑顔を届けるというテーマのもと、2018年7月の西日本豪雨で大きな被害が生じた西予市野村町にある乙亥会館をお笑い芸人の和牛の2人が訪ねていて、見ていて元気な気持ちになった。乙亥会館がことし5月に復旧・再開したことや、豪雨からの復興や地域の活動に頑張って取り組む人々を取り上げていて、前向きな内容でよかった。乙亥会館で相撲の稽古を行っている地元の小中学生の様子は、とても生き生きとした姿が映し出されていてよかった。
- 7月10日(金)の「みかんの花が咲く谷で 西日本豪雨から2年」を見た。西日本豪雨から2年がたってもなお地域の復興が十分に進んでいない様子がよく理解できた。苦境を語るみかん農家の方々のことばは心に刺さるものがあり印象に残った。同じ豪雨による被災地ではあるが、状況はとても対照的に感じた。今後も豪雨被災地の明るい話題と難しい課題の両方を、引き続き取材・発信してほしい。
- 7月10日(金)の「みかんの花が咲く谷で 西日本豪雨から2年」を見た。西日本豪雨によって被災した“愛媛みかん発祥の地”こと、宇和島市吉田町奥白井谷地区のこの2年を記録していた。いまもなお地域全体の復興は道半ばで、完了までには長い時間が要することを取り上げていて、災害の恐ろしさを再認識させられた。みかん

産地の誇りを胸に地区の復興の旗振り役を務めるみかん農家の清家明さんと、災害を機に仕事を辞めて地元に戻ったという息子の歩さんを中心に取り上げていたが、2人の語ることばにはどれも重みがあり、みかんの産地を守りたいという思いや家族への思い、今後の悩みなどがよく伝わってきた。取材対象者と制作者との信頼関係が見て取れ、2人のことばの機微を適切に伝える編集がされているように感じ、好感を持った。そのほかの地区の人々も、苦しい状況ながらも復興に向けて懸命に取り組んでいる姿がとても印象に残った。地区の再編復旧の完了までにはまだ時間が要すると思うが、継続して取材し、発信してほしい。

- 7月9日(木)の「NHKニュース おはよう日本」で、「令和2年7月豪雨」関連のニュースを放送しているさなか、茨城県南部を震源とする最大震度4の地震が発生し、即座に地震関連報道に切り替わった。その後、比較的長時間にわたって地震関連報道を行っていた。経験上、震度4程度の地震であれば大きな被害が生じないと理解しているが、NHKの地震報道の基準がどのようなものなのかが気になった。

(NHK側)

震度3以上の地震が発生した場合、震度などの地震情報は全国向けに伝えることとしている。

(NHK側)

個別の地震情報にどの程度の時間を割いて伝えるかについては、地震の規模や被害の状況などを考慮し、総合的に判断している。

- 7月10日(金)の「ひめポン！」を見た。宇和島市で朝だけ営業しているという、地元で人気のうどん店の閉店を取り上げた話題では、昔の写真やお客さんの声、店内の色紙を紹介するなどしており、店の雰囲気がよく伝わってきた。地域の知られざる名店のエピソードをうまく取り上げていて着眼点がとてもよいと感じた。新型コロナウイルス関連などの暗いニュースが多い中で、見ていて心に響く話題だった。
- 7月16日(木)の世界はほしいものにあふれてる～旅するバイヤー極上リスト～「マルタ&フランス 麗しの手仕事SP」を見た。マルタとフランスの景色やガラス細工やアクセサリ、工芸品などがとても美しい映像で記録されていて、見ていて心躍るものがあった。字幕テロップも視聴のじゃまにならない分量で、適切だと感じた。MCを務める俳優の三浦春馬さんと歌手のJUJUさんのコンビもよく、見応えがあっておもしろかった。冒頭で、亡くなられた三浦さんの追悼テロップが放送されたが、番組に欠かせない存在だっただけにとっても残念だ。今後番組がどうなるのかが気にな

っている。

- 7月17日(金)の四国らしんばん「祭りのない夏～阿波おどりのまちは～」を見た。徳島市の阿波おどりの運営についての問題はここ数年、全国ニュースでも取り上げられるなど大きな話題になっていたこともあり、ことしの動向が特に気になっていた。新型コロナウイルス感染拡大の影響によって祭りが中止となり、阿波おどりで使用する足袋の製造業者や宿泊業などの幅広い産業に影響が生じていることなど、地域に大きな影響が出ていることが分かった。感染防止のために人目を避けて練習しているグループが、SNSで批判されていることも紹介され、中止の余波が広がっていることを痛感した。踊り手のグループである「連」の所属する団体には、大きなものが2つあることが紹介されていたが、“コロナ時代”における阿波おどりのガイドラインを一緒につくろうと両団体が話し合う様子からは緊張感が伝わり、問題の複雑さをかいま見ることができた。阿波おどりの開催に向けた動向を、引き続き取材・発信をしてほしい。

- 7月3日(金)にNHKのホームページ「NEWS WEB」に掲載された「阿波おどり 新型コロナで中止 地元宿泊施設の3割が廃業検討」を見た。宿泊業は、そもそも新型コロナウイルス感染拡大による需要減で大きな影響が出ており、徳島市の阿波おどりの中止はあくまでそれに拍車をかけているにすぎないと思う。ニュースの見出しと内容を見ると、阿波おどりの中止による影響だけで宿泊施設が廃業を検討しているような印象を与え、適切ではないと感じた。取り上げ方に配慮がほしいと感じた。

- 7月17日(金)の四国らしんばん「祭りのない夏～阿波おどりのまちは～」を見た。とてもタイムリーな情報発信だった。ただ、阿波おどりの中止による地元経済への影響と、踊りの伝統をどう継承していくかについての2つの切り口を軸に構成していたが、全く別の内容を無理やり一つの番組の中に詰め込んだ印象を持った。阿波おどりの「連」が所属する2つの団体は、長い歴史の中で必ずしも協調関係にあるとは言えなかったが、阿波おどり自体の存続が困難を迎えていることをきっかけに協調の動きが出ており、そのことをしっかりと取り上げていたのはよかったと思う。全体としては、伝統の継承についての動きに絞って地域経済への影響はまた別の番組でしっかりと取り上げたほうがよかったのではないかと感じた。

(NHK側)

今後の阿波おどり実施の展望は、新型コロナウイルス感染拡大による影響もあって見通せなくなっている。引き続き取材を行い、ニュース番組や「あわとく」「四国らしんばん」などの番組の中で発信

していきたい。

- 「令和2年7月豪雨」関連の報道は、しっかりと取材・発信がされ、視聴者にとって有益なものとなっていたと思う。災害報道にしっかり取り組むことで、NHKが災害時に信頼して見てもらえるメディアであってほしいと思う。一方で新型コロナウイルスに関する報道は、東京の感染者数の増加の取り上げ方が、必要以上に危機感をあおったものになっているように感じて気になっている。感染者数を取り上げる際には、検査数や陽性率、重症者数などのデータもあわせて紹介するなど、客観的で多角的な報道を心がけてほしい。

- 若い世代を中心にいわゆる「テレビ離れ」が進んでいる中、ウェブサイトやアプリで放送番組を視聴できる「NHKプラス」は、そういった人たちにもアプローチをするきっかけとなりうる、とてもよい取り組みだと感じている。過去の番組を一定の期間視聴できる見逃し配信も、放送後に話題になった番組を改めて視聴することができるよいものだと思う。一方で、比較的短時間のネット動画を見慣れている人にとっては、長時間の放送番組を視聴するのは負担に感じるかもしれない。「NHKプラス」のID登録が非常に複雑で難しく、手間に感じた。この手間を惜しんで視聴や登録をあきらめている視聴者がいるように感じ、もったいなく思う。情報セキュリティーに十分に配慮しつつ、より簡素化できる方法を検討してほしい。

- 民放と比べて、SNSを活用したドラマのPRなどが少ないように感じる。若い世代はSNSから話題の番組の情報を仕入れている人が多いと思うので、より積極的なPRに取り組み、新たな視聴者の獲得に努めてほしい。

NHK松山拠点放送局
番組審議会事務局